

人はたがやす 水牛はたがやす 稲は音もなく育つ

優生保護法の改悪と闘おう

村上やす子  
森 冬実

23

水牛楽団だより

22

メキシコ農民運動の新しい波

山崎カヲル

20

水牛楽団コンサートのさまざまな歌

18

水牛楽団コンサート・プログラム

17

写真ルポ・七間町の七ふら市

小島 稔

2

# 写真ルポ・七間町の七ぶら市

小島 稔

さる九月二六日、抜けるような青空の日曜日、僕は静岡市のある商店街の歩行者天国をカメラ片手にとび回っていた。そこでは商店街の催事イベントが展開されていた。商店街の催事というとすぐ特売セールを思い浮かべるが、ここ七間町商店街のは少し違う。いや、おおいに違っている。

静岡市内と近郊の自然食品の生産者に得意の生産物・製品の出店を出してもらい、それに子供をメインとしたいろんなイベントを組んで、秋の日の午後を地域のお客に楽しく過ごしてもらおうというのである。

名づけて「七ぶら市」という。「銀ぶら」とは銀座をぶらつくからであって、七間町をぶらつくなら「七ぶら」と呼んでいいんじゃない

か、というシャレから出た通称。昨年七月二六日にスタートし、八回目になった。

内容は自然食品の「たべもの市」に、ジャンボ輪投げ、スポーツ広場(綱引き、パンくい競争)、体力コンテスト、DJ(ディスクジョッキー)、ステージ、子供広場などのイベントをギッシリ盛り込んである。

主催はと見ると、宣伝チラシには静岡七間町名店街と街を生活を考える市民センターの「共催」とかいてある。商店街と市民連合団体との共催で商店街の催事が展開されるところが、全国でも珍しいケースであり、「水牛」というカタイ雑誌(?)に商店街活動などという、やたらワラカイ日常的なレポートが割り込む唯一の理由なのである。

二つの共催団体の出会いが、自然食品と地域商業というテーマを生み出したのだといえる。二つの共催団体はそれぞれ運動の中で問題意識を煮つめてきたのである。そこんところをまず簡単に紹介しておこう。

まず七間町名店街。静岡市では「五指に入る」と地元の人がいうくらい市中心部の老舗を多く抱えた名門商店街だ。が、近年やや停滞気味であるのが実情。それは商業の立地環境が変化したこともあるが、市の商業全体が、大型店の進出などで競争激化の様相を示していることも大きな原因だ。東京の西武百貨店など市外からの出店に加え、地元商店街大型化などで、「オーバーストア」状態となり、中小の小売店は経営が圧迫されるにいたった。

そこへもってきて一九七六年末、イトーヨーカドーが三万五〇〇〇平方メートルもの巨大な売り場をもつ店舗を静岡県の南側住宅地に出店すると表明したので、猛然と反対の声が起ったのである。この反対運動は市内の商店を網羅する静岡商業近代化協議会(近代協、牧野聖修会長)を中核として今日まで粘り強くつづけられている。それだけ地元商店にとって、これ以上の外資大型店の進出は死活問題だったのである。

行動隊を組織して大型店問題の調停機関である商調協の開催を全力で粉砕したり、全国と同じような大型店反対運動と連帯活動を展開したりで、いつのまにか静岡の運動は全国のリーダー的な位置にまでの上がってしまった。運動の精神やノウハウを学ぼうと各地から視察にくる商業関係者も少なくない。

しかし、イトーヨーカドー反対運動の中で重要なことは、その問題意識の深化にある。つまり最初は動機といえば単に既得権としての自店の売り上げ儲けを防衛しようというものであった。これが進んで静岡の商業を見直そうということになる。お客消費者の中には確かに東京の大型店の進出を望む声もある。よその都市では消費者団体が出店促進の

運動まで起こしているところがあるくらいだ。

それは消費者が買物の楽しさや便利さを、豊富な商品を求めているからにちがいない。商店が単に防衛的に反対をいつているだけでは、結局、消費者の心が離れてしまうことになる。自分たちも商売を消費者の求めに合うように改革していこう——この意識が「近代協」の名称にこめられているわけだ。

しかし、僕はここでもう一回、問題意識のヒネリがあったと思う。つまり、あり余る商品を沢山並べ、莫大な金を使って買物の環境をつくり出すだけが改革なのかという疑問である。それならば大型店の論理と変わらないし、大型店の方が資力からいって圧倒的に有利だ。もって地元の中小店家らしい本来の商業の姿が必要なのではないか——そこから地域に根ざした、地域の消費者、いや生活者との結合というテーマが出てきている。商売上の売り買だけだけでなく、共に同じ地域に生きる者同士として地域社会のあり方を考えていこうという姿勢だ。

白鳥良香・市会議員が起草したという近代協のテキストには、次のような内容がある。——大型店問題は単に商業の問題でなく都市問題である。消費者の眼からではなく、ト

タルな地域生活者の眼から捉えねばならない。——静岡市は商業の町であり、地場産業の町である。地場産業の雇用貢献度は大手より高い。大型店進出は、この静岡市経済を疲弊させ、雇用不安を引き起こす。また利益の三分の二は東京本社へ持ち出されてしまう。

——街は歴史の中に生きていく。「生活者」の関与がない。「街づくり」や「再開発」は、貴重な生活環境、都市集積を破壊してしまう。こうした内容が数字をあげて説得力をもって展開されている。こうした問題意識が、反対運動の先頭に立って来た七間町商店街、とくに青年部の若手商業者の中で深められ、単に商品を売り込もうという特売セールだけの催事をやめて、「七ぶら市」へと発想を転換させる背景にあったのである。まずは現在の食生活のあり様から考え直そうということによって自然食品をメインにもってきた。それは市内・近郊の良心的な小規模生産者、つまり地場産業との連携でもある。身体を見直そうとヨガの実演をやったりしたのも同じ発想だ。自然食品は当然、商店街の八百屋、食品店との摩擦をひき起こすが、それを何とか説得し実現にこぎつけたのは当時青年部長だった土屋謙之さんら若手商人の情熱と革新性であった。

そして、街と生活を考える市民センターからの接近と「共闘」が、実現への強力なテコとなった。こちらの市民センターについては紙数がないので一言で紹介しておく。反公害から消費者、教育などの市民運動、大極拳まで幅広い運動領域をつつみ込む会員三〇〇名余りの運動体で、いまや市民の生活に確実に根を張りつつある。もちろんイトーヨーカドー反対運動にも関わるとともに、「談合問題」が世間の批判的になっていく最中に出てき

た市庁舎の新築計画を大衆行動でつぶすなど（これはテレビのニュースで全国に勇姿が伝えられた）、大活躍。

七ぶら市当日には、浜岡原発からの使用済み核燃料のフランスへの搬出反対の現地集會が開かれ、多くの活動家・会員がそちらへ参加していたため七ぶら市のほうはやや寂しくなったが、毎回多くの会員がイベントの世話役として青年部の人たちと忙しく動き回っているのである。

こうして社会の仕組みを人の結びつきを変えようという運動が、小さいながら思わぬところで、思わぬ形で生まれてきていることに僕は嬉しさを感じる。大言壮語で人を引っ張り回すような運動ではなく、このような地域に根を張り、日常生活の場から起こってくる運動のいろんな形態をこれからもみていきたいと思う。それらがやがて自分の意志で横に結びついていくことが本当に世の中を変えていくのだろう。

①七間町商店街には現在七四の店があり、商店街の振興組合をつくっている。かつては静岡市の中心商店街として栄えたが、いまでは駅前には繁華街が移り斜陽化した。停滞の脱皮策として七ぶら市が考え出されたわけだ。





◀ ②無添加調味料と無添加・手づくりコンニャクでつくったおでんを食べようとしているのは、元・七青会会長の土屋謙之さん。えびす屋洋品店のご主人だが、七ぶら市の実現に最も骨を折った人。またイトーヨーカドー進出反対運動の先頭にも立っている。

「自然食品といっても、はじめは何コレという人が多かったんですよ。でも、だんだん添加物の害への関心は高まって、商店街の中の八百屋さんで有機農法のジャガイモを売るところが出てくるようになりましてネ」と語ってくれた。

↓ ③自然食品の主役は野菜。しかし、あいにく大型台風が襲れまくった後なので出品数は激減していた。有機農法の野菜の売店を出している静岡マルタという業者の人は、ナス、大根、サツマイモ、キャベツなど二〇品くらいもってきたといっていた。有機農法が普及するにつれ運動的に事業拡大する生産者グループが各地に生まれているが、この静岡マルタもその一つ。





↓ ④いまアメリカではT O F U、つまり豆腐が健康にいいとブームになってきているとか。でも本場日本で本物の天然にがりを使った昔ながらの豆腐はほとんどお目にかかれなくなっている。この吉井とうふ店では、天然にがり、無添加の豆腐、生揚げ、油揚げ、がんもどきを売っていた。大豆腐が一二〇円、ちょっと一人では食べきれないくらいの大ささだった。

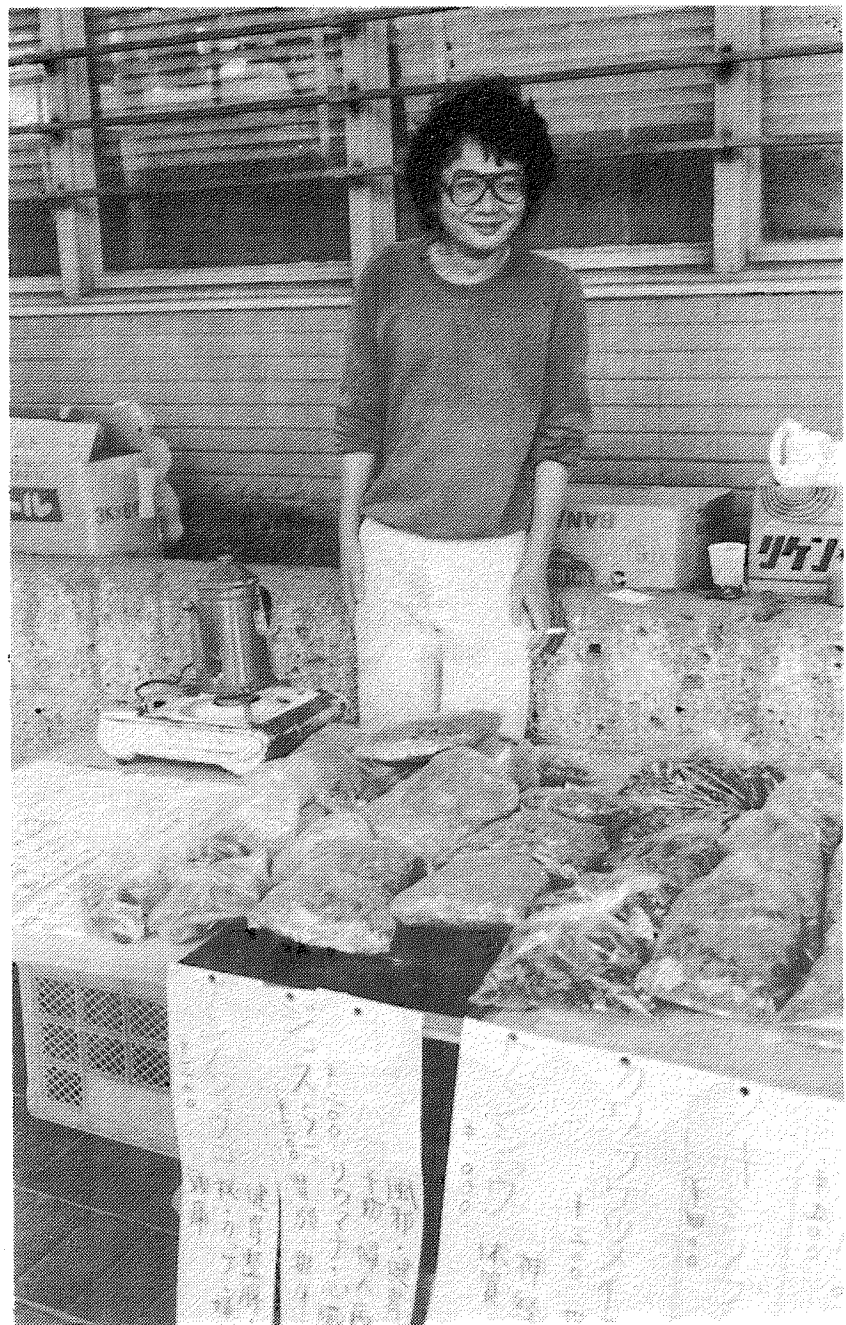
← ⑤このおじさんは朝10時頃に打った手打ちそばや自家製梅ぼし、シソ巻きおにぎりなんかを売っていたけれど、一番の傑作はコレ、竹トンボや竹デッポー。竹デッポーは竹串の先に野菜の切れ端でも何でもいから刺してゴムの弾力でパチンとばす。一〇メートルくらいしかとばないけど安全だし、しかも三連発だ。これで三〇〇円は安い。「こんなオモチャ、むかしは自分でつくったもんだけどネ」と今年六十五歳になる笑顔の若々しい山村昇さんでした。





↑ ⑥コンニャクはイモからつくる。知ってましたか。そんなの常識？  
 では、そのイモを見たことありますかという、黙る人は結構多い  
 のではないだろうか。原料のイモと、コンニャク玉を並べているの  
 は芝田蒟蒻店。「いまイモから直接コンニャクをつくる店はほとん  
 どないですね。いったん粉にして保存したものからつくっているか  
 ら季節に関係なくなってるんです」と、明治から三代目に当たるご  
 主人の芝田次郎さん（三六歳、撮影ミスのため紹介できません、ゴ  
 メンナサイ）は気骨をみせている。

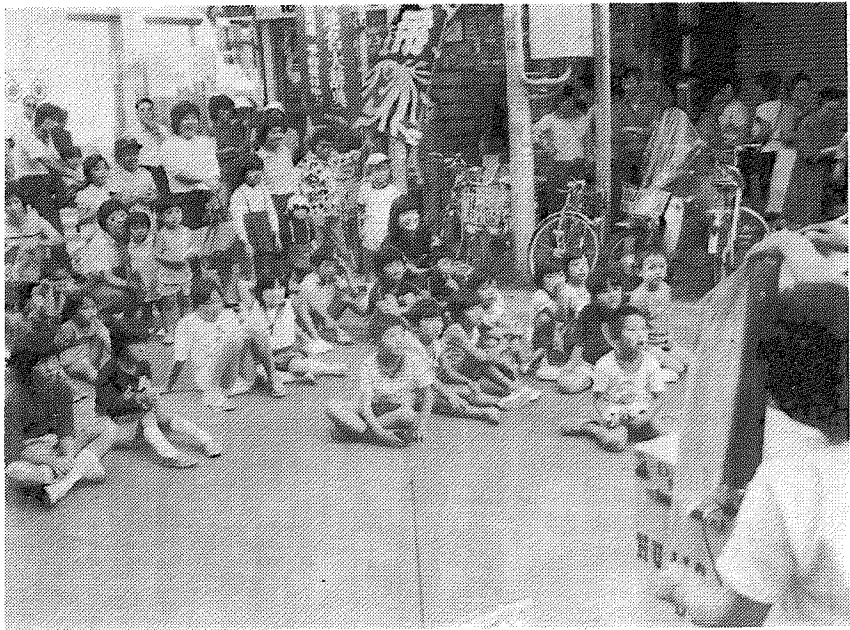
← ⑦胚芽小麦粉でつくった手づくり胚芽パンを出していたのは、やま  
 ばと授産所。手づくりといっても食パンからアンパン、クリートムパ  
 ン、ドーナツなど種類も沢山あって、ちゃんと「やまばとパン」と  
 いうブランドまでついている。この授産所は、やまばと学園という  
 障害者施設ともつながっているという話を、おばさんがしていた。



↓  
 ⑧有機野菜と無添加でつくったキムチを提供するのは市民という市内の朝鮮料理屋さん。高校生くらいの子が楽しげにふざけ合ったりしながら「店番」をしていた。一パック一七〇円。買って食べたが、たしかに焼き肉屋で食べたのと同じ味。スーパーの製品なんかよりずっとうまかった。

←  
 ⑨この人は面白かった。三〇歳の彫刻家、諸星俊彦さん。どこにでも生えてる草を乾燥して煎じ薬として出している。ゲンノショウコは知ってるが、ツユクサがぜんそくや心臓病に効くとは知らなかったなア。「全くの趣味なんです。でも、日本人が西洋医学の輸入で捨てたものの中に大事なものがあつたんです」と諸星さんは日本古来の身近な健康法を説く。声を出して売り込もうという感じはサラサラなく、聞かれたら静かに説明するという、自然体である。





↓ ⑩自然食品といえは無公害洗剤と、二つの仲は切っても切れない関係にある。人間の生命にとって欠かせぬ水を汚染する合成洗剤にかわって、静かに復活している石けんを売っていた。

← ⑪歩行者天国で解放された車道上では、子供を集めて、「大型紙芝居」が開演。「かわいそうな象」では、戦争の犠牲になった動物園の動物たちを描いて戦争のあやまりを子供たちに訴えていた。子供たちの熱心な眼差しを見て下さい。将来この子供たちが真剣に平和を考える人間に育つように祈ります。立体紙芝居まで考案して熱演したのは竜南地域を考える会の女性たちでした。





## 水牛楽団コンサート・プログラム

11月22日(月)午後7時、東京文化会館小ホール

11月26日(金)午後6時半、福岡中央市民センター

タイの歌=人と水牛/いのちの海

高橋悠治「ジット・プミサク」フルートとピアノ

チリの歌=ありがとういのち(ビオレータ・パラ詩・曲)

宣言(ビクトル・ハラ詩・曲)

日本の歌=里子にやられたおけい(窪川鶴次郎詩・守田正義曲)

いぬふぐり(すずき・みちこ詩・曲)

エリック・サティ「梨の形の三つの小品」ピアノ四手連弾

アウ合奏=夜ばいの曲/しずくの曲

パレスチナの子どもの神さまへのてがみ(高橋悠治曲)

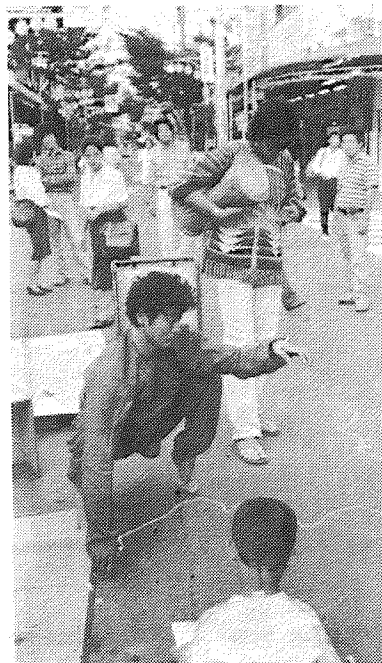
戸島美喜夫「ベトナムの子守唄」ピアノ

高橋悠治「オドラデク」ピアノ

ポーランドの歌=しだれ柳/今日は会えない

ショパン「ファンタジア」Op.49ピアノ

水牛楽団の歌(ウェンディ・ブサート・高橋悠治曲)



④ こちらはセミプロ級ロックバンドのDJ(デ  
イスク・ジョッキー)ステージ。ロックやフ  
ォーク、それに演歌の演奏の合間にイントロ  
当てクイズ。正解者への賞品として「未完の  
対局」の招待券15枚が用意されたが、やは  
り小・中学生のヤングパワーがつかった。

③ 突如とび入りて前衛演劇が舞踊のハフニン  
グ演技があった。生の原形を表現しているよ  
うで眼をひきつけられたが、そばで砂絵づく  
りに夢中になっていた子供たちはビックリし  
ていた。



# 水牛楽団コンサートのおまじな歌

水牛楽団のいままでの楽器のうけもちをかえ、もちかえ楽器をふやした機会にアレンジもすこしかえた。歌も、ちがう声がきけるように分担する。また、水牛楽団以前にやっていたこと、ピアノをひくとか、フルートをふくことも、楽団の活動のなかにとりこんでしまいたい。しかも、全体としては、あれこれの技術がすつかりかかれるような、すつきりしたかたちをめざす。というようなことをたためず機会として、このプログラムをあらだ。

まずは、カラワン楽団のレパートリー、水牛楽団の名の由来となった「人と水牛」。原曲はボブ・デイランの「戦争の親玉」だといわれれば、そうだが、たしかにおなじだが、タイ語の抑揚によって、まるでべつな歌になって

しまった。水牛楽団のやる「人と水牛」はカラワンのもともまったくちがう。ちがう手ちがう声を通すだけで、歌はこんなにかわってしまふ。だから歌はだれのものともいえない。どこからやってくるものか。

タイの革命詩人ジット・プミサクの作詞作曲による「いのちの海」のメロデーも、タイのものではない。どこかスラブ系のメランコリーがたがよっている。

フルートとピアノのための「ジット・プミサク」をかいたのは一九七八年だったか、そうだとすれば水牛楽団をはじめた年だ。カラワン楽団の「ジット・プミサク」（これもイギリスのパラード「ジョン・パリコン」のメロデー）という歌をもとに、中間部はジツ

トの詩によるカラワンの「コメの歌」がかけられているし、最後はジツトが解放区にいつてからの「パン革命」による。

ビオレータ・パラの最後のレコードにある「ありがといのち」をビオレータがやったように、チャランゴと、心臓のようににぶい音の太鼓のびびきできいたあとで、ビクトル・ハラ最後の年にかかれた「宣言」。それから、ほとんど忘れられかけた日本の歌、一九三〇年代のプロレタリア音楽運動のなかでつくられた「里子にやられたおけい」と一九五四年のうたごえ運動から「いぬぶくり」。

エリック・サティは一九〇三年に「梨の形をした三つの小品」をかいた。西洋梨のようにふくれあがった（俗語では梨はバカという

意味もある。頭がちいさく、腹が大きい）世紀末の音楽に対して、ここでは題名だけが水まじされている。「はじめ方、同上、おまけ、言いなまし」と四曲もついて、全体は七曲ある。当時のぜいたくな音楽は色あせた。だが、サティの音楽はいまも、つつましく生きていたる。

ソロモン群島のなかのマライタ島にすむアラレ族のパンパイフ合奏「夜ばいの曲」と「しずくの曲」。ここでは楽器はすべて竹でできている。竹も楽器も、その音楽もアウとよはれる。楽器をあやつって自分の音楽をやろうとするのではない。竹の声をききとるのが竹の音楽だ。

土地を追われ、家をやかれ、殺される「パレスチナの子どもたちの神さまへのがみ」。なぜ、こんなに生きていなければならないのか。だが、それにこたえられるだろう。

戸島美喜夫はベトナム南部でうたわれる子守唄と笙ケーンの合奏音楽にもとづいて「ベトナムの子守唄」をかいた。子守唄をうたう母親は夜どおしねむらず、愛する夫のことをおもっている。池に月影がうつり、心はかなしみでいっぱいになる。

「オドラデク」はカフカの短篇「父の気が

かり」のなかにてでくる。ひらべったい星形の糸巻のようにみえるちいさなもので、たちまちみえなくなるが、また家にもどってくる。「なまえは」ときくと、「オドラデク」とこたえ、「うちは」というと、「きまつてない」といって、枯葉のようにかすかなわらい声をたてる。そしてだまってしまう。

ポーランド・パルチザンの歌はいさましく、かなしい。「しだれ柳」も「今日は会えない」も、ただかいの道をえらび、ねばりづよくそれをすすめながら、そこで死ぬことのつらさもしっている人たちの歌だ。

ショパンが一八四一年にかいた「ファンタジア」にながれるのも、おなじ歌だ。絶望の底から炎が上がり、戦士の列はいつかともむらいの行列にかわる。このとらえどころのない幻想のなかから、歌をふきはらうあらしのあとのこるのほ、ほとんど透明になった希望のひびき。

今日も世界のいたるところで、人びとは裏切られ、追いつめられ、殺されてゆく。それも、信じていた教えとおきてによって。ほかのことをすすることができても、このささやかな水牛楽団をすすてないのは、あのかすかなひびきを耳がききとってわすれ

られないでいるためだ。ひとりが死ぬたびに、ちいさなローソクに火がともる。死が希望をやしなう。空いっばいの死者たちが、この世の明るさ、たのしいわらい声のために身をもちやしているのが見えるようだ。

この供養が歌になる。死んでしまった他人の声にとりつかれてうたう。どんなにいい音楽よりも、ほとんども見こみのないように見える水牛楽団にこたわるのも、灰のなかのおき火灰かつぎの妹娘を愛しているからだ。この世界、かくれている妹たち。

オーストラリアのメルボルンからアジアの迫害されている人たちを見つめるウエンディがおくってくれた「水牛楽団の歌」。

不安からことははうまれ  
涙から歌がそだつ  
歌はたがやしてゆく  
水牛のように

# メキシコ農民運動の新しい波

山崎カヲル

メキシコの農村を歩くことは、楽しいと同時に、気がめいる経験でもある。どの村に足を踏み入れても、何世紀ものあいだ堆積された貧困と抑圧とが、家や人々のたたずまいのなかに、露骨に眼に見える傷跡として刻み込まれている。その余りの可視性は、日本での「繁栄」にボケた頭には、時として非現実的なものとして映るほどである。ルイス・ブニエルの映像が、眼前に風景として展開しているのである。

そうした村のアドベ（日乾しレンガ）の壁のあちこちには、VOTE ASI（こう投票せよ）のマークが描かれ、CNCという文字が添えられている。メキシコの選挙は政党本位で行

なわれ、いまだ数多い文盲の人々のために、投票は政党のマークに×をつけることで行なわれる。PRIとは巨大与党の制度的革命党を示し、CNCはその支配・集票マシンの一端を担う全国農民組合の略称である。

PRIとCNCの文字は、村の壁、太い樹の幹、道路はもとより、山の中腹にまでデカデカと書かれている。選挙のたびごとに、CNCは日当を払って農民を駆り集め、トラックに彼らをつめこんで投票所に送りこむ。もちろん、PRIに×印をつけるよう厳重に指示したうえで。

農村でのPRI支配は、地方ボスとその輩下のピストレロ（ガンマン）たち、警官、軍隊、弁護士、仲介商人、収獲物の公営買入

れ組織、消費協同組合、教会等の複合体によって支えられている。要するに、暴力、金、宗教である。農民たちの不満や反抗は、CNCの官僚機構を通過させられることで、うやむやのうちに「処理」され、その「処理」に異をあえて唱える農民は、ある夜、家からひきずり出されて、後頭部に銃弾を撃ちこまれて最終的に「処理」される。かくして、農村に「問題」は生じないのである。

労働運動におけるCMT（メキシコ労働者連盟）と、農民運動におけるCNCとは、与党支配の大衆的基盤を形成している。この支配の有効性は、本年の大統領選挙で与党候補デ・ラ・マドリが獲得した膨大な票に現われている。とはいえ、CTMにしるCNCにし

ろ、十年前、二十年前に享受していた絶対権力を、今では保ちつづけることがむずかしくなっている。すさまじいペソの暴落を前にして、この九月に強行された銀行国有化は、労働者・農民の生活破綻が「独立系」組合を強化するのではないかと怖れた、組合ボスや農民ボスの圧力の原因のひとつにしていた。

この「独立系」（インデペンディエンテ）と呼ばれる組合の伸長のなかに、かつて十年におよぶ革命を支えたメキシコの労働者・農民の力の再生を見て取ることができる。独立系の労働運動は、日産メヒカーナをまきこんでいるので非常に興味深い。ここでは農民運動だけに話を限定したい。

これまでも、CNC支配から脱した農民たちの闘争がなかったわけではない。むしろ、その数は少なくなかった。だが、左翼政党の伝説化した分裂と対立、抜きがたく存在する地方エゴイズム等のために、そうした運動は孤立したまま撃破されてきた。この事情は、今では大きく変わりつつある。CNP A（フラン・デ・アヤラ全国調整組織）が誕生したからである（フラン・デ・アヤラはアヤラ綱領とは、メキシコ革命期のエミリアーノ・サパタの政治綱領の名前である）。一九の農民、原

住民組織の結合体であるCNP Aは、各地のバラバラな運動を全国規模で結びつけ、高度の戦闘性（したがって苛酷な弾圧）をさまざまな闘争に与えることで、多くの農民たちに希望を与える存在となっている。

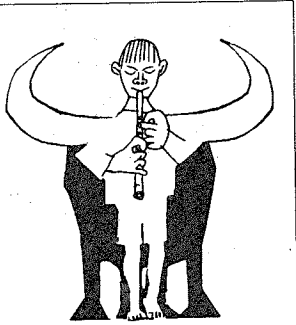
本年七月に、チアパス州ベヌステイアノ・カランサの町で、CNP Aは第五回目の全国集会を開き、三千人もの人々が町を埋めて白熱した討論を展開した。幸い、私の友人がこの集会に参加し、その見聞記を送ってきてくれたので、その一部を紹介したい。

CNP Aは、その自立的戦闘性のために、常に弾圧の最尖端に立つことになるが、今回警察の挑発に備えて、農民たちは自主警備隊を組み、常時緊張した雰囲気なかで討議がつけられた。私の友人はその席上でベラクルス州から来た二九歳の農婦と交した話を書き送ってくれている。彼女の父親は昨年初めて土地闘争への軍隊・テロ団の銃撃で死亡、弟は同じ闘争中に連邦警察に連行されて行方不明、彼女は弾圧に抗議する人々とトラコルーラの町広場で、妊娠三カ月でありながら一週間のハンストを行ない、このために流産している。「彼女自身も一カ月の間、生死

の間をさまよった。こうしたことを何の気負いもなく、センチメンタルにならず、悲愴感さえなく、たんだんと語り、「一週間ハンストをやったらずいぶんやせるんじゃないかと思ったら、全然やせないで、今も私こんなに太っているよ」といって笑う彼女」に、友人は深いインパクトと感動を受けたと言う。

彼女は自分の町から、夫と二歳の女の子とともに、この集会に加わるため、二〇時間以上もバスにゆられてきた。このような人々の集合体がCNP Aなのである。

CNP Aは着実に拡大しつつある。CNP Aに所属するCOCEI（テウアンテペク労働者・農民・学生同盟）は、オアハカ州の町フチタンの選挙で勝利し、この町はCOCEIのものになった。フチタンを取材したある週刊誌が、厳しい顔つきで銃を握り、町役場を警備する青年の写真に掲載しているように、彼らがいっ血の弾圧に直面するか予断を許さないが、サパタの伝統を継ぐ人々は、土地と権力のために、またグアテマラやエル・サルバドルでの勝利のために、カンペシーノス（農民）の明晰な声をあげつつある。



水牛楽団のページ

映画「原釜切抜帖」の音楽では、チャランゴ、シーク（ポリビアのパンパイプ）、トイピアノ、ピアノをつかって「軽音楽」をつくってみた。「リンゴの歌」や「君といつまでも」のパロディー、クリンタン風「ラバウル小唄」、ペラウ共和国国歌など。

演歌のようなものは、そっけなく、うわのそらでやってみると、ポップでよかった。

しばらくは休みなので、いまままでつかっていたハルモニウムを小型のポーターブルにかえてみる。できれば、いままのようにハルモニウムによりかからないですませたい。ピッチがかわるので、ケーナはつくりなおし。大正琴とピアノは亀田伊都子の担当になる。チャランゴは福山敦夫。

この編成で十一月二十二日（月）に東京文化会館小ホールでコンサート。内容は本文。おなじプログラムで二十六日（金）に福岡。これは「同時代音楽に何ができるか」というシリーズの2日目。前日は「柴田南雄の世界」次の日は「坂本龍一とB2UNIT」のコンサートがある。

十二月六日（月）六時半、草月ホールで、「水木陽子コンサート・暗い日曜日」。一九三〇年代の世界の歌をあつめて、伴奏は水牛楽団、高田みどり、梶政雄。

十二月九日（木）六時、「教科書問題を考える音楽と文化の集い」、日本武道館。日ワイエルと小室等と水牛楽団。水牛楽団は「祖母のうた」、「イエーガラサー」、「部隊ニ召サレタ父ハ」、「奪われし野に春はくるか」、「強制連行の歌」、「人と水牛」の六曲。

十二月十日（金）七時、原宿ヤシカビル地下の茶房ナームで「水牛楽団どぶろくコンサート」。ゲストはどぶろく文化の会代表の前川俊彦、司会は田川律。入場料千五百円、ただし予約だけで定員百名。歌のだしものは、「どぶろくつくりの歌」、「飲み屋のヒーロー」、「水牛楽団の歌」、そのほかリクエスト・コーナー。自家製の酒もちみかんげい。

# 優生保護法の改悪と闘おう

——今年になって「優生保護法」の改悪準備がパパバタとすすめられている。そして「82優生保護法改悪阻止連絡会」の人たちが、最近「優生保護法改悪とたたかうために」というとてもよくできたパンフレットをだした。ぼくなどはこれを読んで始めて知ったことが、たくさんありました。ここに「優生保護法」の全文が、そのもとなつた「国民優生法」とともに、資料として掲載されているんだけど、こんど削除されようとしているのはどこなんですか？

村上 第三章の第四項——「妊娠の継続又は分娩が身体的又は経済的理由により母体の健康を著しく害するおそれ」があるときは、医

師の認定によって中絶してもいいという、その「経済的理由」のところです。

——そこが削除されることによって、いまままで有名無実だった墮胎罪（刑法第二十九章）がよみがえってくる。

森 墮胎罪というのは、実際には一九七一年から八一年までの十年間、業務上過失致死というかたちで医者が起訴された例があるけど、女の人がひつくりくられちゃったということはないのね。ただ墮胎罪を歴史的に見てみると、国家が戦争への道を歩きはじめると、急に見せしめ裁判的なものがふえてくる。それが特徴なんです。

## モンコンと水牛楽団

カセット  
楽にかえる・空は限りなし・ロンハーブンのちの海・たけのこ・せみ他 全12曲  
出演 水牛楽団・ウトック（歌とピアノ）、水牛楽団 歌詞の日本語訳付 定価二千円 送料二四〇円

## ポーランド

## 禁じられた歌

ポーランド国歌・しだれ柳・今日は会えない・秋の雨・モンテカシノの赤い芥子・埋められた武器の子守歌・明日はワルシャワ・祖国との別れ（オギンスキ）・ポーランド式料理のつくりかた・娘にあたる歌・ヤネクウイシニエフスキは死んだ・革命（シヨパン）・ストラト（百年） 出演 水牛楽団・水木陽子・林光・高橋アキ・津野海太郎 定価二〇〇〇円 送料二四〇円  
申込みは水牛編集委員会  
郵便振替口座 東京四一九一七九二まで

## 村上やす子

## 森 冬実

村上 農村で集団でよびつけられて訴えるとか、女優の志賀暁子さん——あの人なんかはスキヤンダルにしたあげられて、「墮胎は悪である」というキャンペーンのために殺されてしまう。墮胎の禁止は明治のはじめからありましたが、墮胎罪という名前で行されたのは明治四十年からですね。明治の富国強兵政策のなかでつくられた法律なんです。

森 たえば一九二二年にサンガー夫人が来日して、受胎調節でベッサリーの使用法をデモンストレーションしようとしたでしょう。あのときも、医者および助産婦にはデモンストレーションしてもいいが、一般市民にはやってはいけないということ、たしか陸軍だつたと思いますが、彼女を二回よびつけて

弾圧してゐるんですね。

それから、満州事変がはじまった翌年の一九三〇年には、妊娠調節が禁止される。そういうときにならず妊娠・出産の管理がすすんでいく。そして太平洋戦争がはじまった一九四一年には、優良多子家庭の表彰を「国民優生法」のできたのが、ちょうどその前年ですよね。で、それまでもいろいろなフェミニズムの運動があつただけで、それが大日本婦人会に統合されていった。

——こんどの場合も、その明治四十年にできた刑法第二十九章の墮胎罪が適用されるケースが、どんどんふえてくると予想されるわけですか？

森 ヤミ中絶がふえてきて、それをスキヤンダラスにあつかうことの決定打として、まず墮胎罪の摘発が何件かはあると考えてます。

——墮胎というコトバ自体がセンセーションアルていやなコトバだから、そのコトバだけでおびえちゃうということもあるだろうね。

なさいということ。たとえば老人問題でいえば、ひとりつ子同士がむすびついたら、どつちかの親しか面倒が見れないでしょ。人生めばやつと両方の親が見れる勘定だから、いまは平均一・七人ですね。それでは数としてかれらがいつているような家族構成を成立させることができない。その点では、人口問題はさておき、ともかくも家族を維持しなければならぬという考えがでてくるわけですね。経済的な基盤としての家族ね。

森 わたしは「性の方向性」ということばをずつとつかつてきたんだけど、一对の男女のベニスとヴァギナの結合が、種族の保存とかさ、子どもを迎えるという方向性をもたされてきたでしょ。したがって、もう一つの、快樂とかプレイの要素はタブー視されるわけね。一夫一婦制とか男女一对のセックスの方向性は社会通念的にみとめられても、その人たちに子どもがないとか、女に子どもができない場合とか、つねにおびやかされてきた。女と女、男と男というかたちで「性の方向性」を考へる人たちもいるけど、すごく疎外されているのね。国の維持のためには、結婚制度・家族・子どもがなくてはいけない、そして男と女という異性の対の関係でなくてはいけな

森 そう。間びき、子殺し、という一連の感じね。水子供養とかね。

——一九七〇年、七二年にも「優生保護法」の改悪がこころみられて、失敗した。それがいまもう一度だされてきたということの、向う側の意図というか、ポイントはどこにあるんですかね？ いまきいたことでも、おおよそはわかる気がするけど……

村上 十代の性の問題とか、私利私欲を追うようなエゴイズムによって墮胎がされて、それが生命を軽視する社会的な風潮をつくりだしているとか——それがかれらの表むきいつていることなんです。 「優生保護法」の経済条項によって墮胎が合法化され、それによって人心の乱れが生じた、諸悪の根源だといっているんですけど、それをいつているのが「生長の家政治家連合」で、かれらは憲法と優生保護法の改正を一大悲願にしているんですよ。いろいろ美辞麗句をならべてるんですけど、要するに、「われわれは天皇の赤子である、われわれの生命を三十代むかしにさかのぼると二十一億なんばのご先祖さまの生命につなが

いということなのね。

セックスはかならず種の保存にむかっているというわけじゃなくて、コミュニケーションとかスキップだったり、ただの遊びだったりするわけですよ。それなのに、からだが大人になったら世帯をもたなきゃ、子どもを生んで育てられなきゃということになってしまふのね。そうやって家族をつくって、それが戸籍制度にどっぷりつかつて、そこから税金を搾取することによって国家が運営されていく。

村上 戦後に中絶条項をとり入れたのは、民族の純血性を保持するということと同時に、いったん女を労働市場にかりださなきゃならないという経済的な理由があつたからなんです。それがいまは先細りの経済のなかで、まづ女が切られていきますよね。経済操作が出産の管理というしかたで、ひとりの女のモラルや生き方を規制するかたちで実際に必要な出産の管理は、つねに国家のなかで女がおかれてきた位置をしめしているんです。

——なるほどね。そこがいちばん管理しやすいところなんです。

つている、そういう生命の流れを中絶が断ち切つてしまふ、バラバラのアトム社会になつて、日本民族は死滅への道をたどるであろう」ということなのね。つまりかれらにとつての生命の問題というのは、日本民族の死滅ということなのね。かならずでてくるのが「天皇」であり、「日本民族」であり、それをささえる「家族」であり……

——そうすると、高齢化社会になって若い労働力がだんだん減つてきたらどうするんだという経済的な危機感と、そういう道徳イデオロギー的な危機感の二つがかさなつて、こんどの改悪問題がでてきたということになるのかな。

村上 家族ということ考えれば、一組の夫婦が最低二人の子どもをもたなければ、いまの人口は維持できないんですよ。そうしてよ、当然。かれらは一九七九年の「家庭基礎充実政策」のなかでも、「日本型の福祉」ということばをつかっているのね。従来日本の家族的なよさを生かした福祉とはなにかという、結局、老人の問題も子どもの問題も社会的な保障の問題も、ぜんぶ家族がかぶり

森 情緒操作というか、女の人の気持をゆさぶることによつてね。「生長の家」がいつていることは、すごくセンチメンタルですよ。

村上 日本ではどうもね、母性という、成人した男の人でもなんかそこにノスタルジーを感じちゃうような、そういう精神的な構造があるでしょ。私たち自身も母親としてのそれはあるわけよ。だけれどもあたしは、母性なんてことを戦争を準備してる者たちに語らせてはならないと思うの。もしあたしたちに母性があるとしても、それは本来的にちがうと思う。

母性ということばでいわれているのは、個人が自然にもつてる欲求がいろんな生き方ななかで、ほかの人間をえらび、そこから自然に生まれてきた存在と折りあひをつけて生きていく、そういう関係の中味だと思ふのね。母性というのは、なにも母親がオッパイをやることにしめされるだけじゃなく、そういう調整のしかたの一つのかたちだと私は思つてるから……それは女だけにあつてはいけないものなのよ。みんながもつていなければいけないものなのよ。女だけに母性がことさら押しつけられるその分だけ、男たちとか社会的ななかで、たとえば福祉の切り捨てとか軍備の

増強がすすめられていく、そこを見ないといけないと思うのね。

子どもをそだてていくなんて当りまえのこととしてよ。いまの母親たちはどうのこうのといったってね、いっしょに生きていこうって気持ちでいけばなんもってのは母親なんであってね。母性がどうのこうのっていつてる人たちが、ともに生きていくという姿勢をどれだけでももっているかという、そういうものをどんだん切り捨ててのがその人たちなわけですよ。母性なんてことがことさらにいわれるのは危険信号なんだと——そのへんを男の人たちもわかってないと、どうもね。「お母さん！」とかかわっていきような構造が男の人たちのなかにはあるみたいなのね。

——いまから十年ぐらい前だと、父性の復権とかいわれてたけど、たしかに最近はその母性が強調されることとおおいみだいなね。でも、それは日本だけでもないでしょう？

森 ドイツでもね、女の人にいちばん向いているのは子どもを生み育てていくことなんだから、職場から家庭にお帰りなさいという政策が、ナチス台頭のころにでてきている。

あとはあらゆる状況で「産めよ育てよ」と——二本立ての支配をきちんとたてなおそうということなのよね。

——人口問題との関連について、政府の側にも議論はあるんでしょう？ 人口を増やすべきか減らすべきかよりも、家族制度の再建のほうが緊急の課題なんだという点では一致してるわけですか？

村上 人口構成の面では、日本人が高齢化して若年層が減るといふ不均衡は、国にとってはやっぱり憂慮すべき状態なんです。それを是正するためには、これからどういふふうに侵略的になっていくのかはわからないけど、要するに、あまった人口をわりふりしていく市場や労働現場をもっと拡大していこうということでしょうか。

わたしたちとしてはひとまず、中国なんかもそうなんだけど、人口政策上から生むとか生まないを強制されることには反対している。ただ、いま先進国でいわれている人口政策というのは、後進国での人口増加にかんして、中絶とかピルの強要とかによって押さえていこうということでしょうか。だから人口が増えすぎると

村上 アメリカでも「古き良き時代」みたいな懐古調の政治運動というのは、やっぱり中絶中止をだしてきている。強い男というイメージをすくくだしてきてるでしょ、いま。でも母子密着ということにかんしては、日本は非常につまらないんじゃないでしょうか。いつもコミであるというね。母性なんてものは、だから性の延長としてとらえるべきものだと思うのね、性というものをせまく限定して考えなければ。それがことさらに美化されると、子どもが親に抵抗しながら育っていく面が殺されてしまう。いまはそういう風潮もでてきているでしょ。いまの教育の混乱なんかも、つよい力で押しつぶしてしまおうほうがいいんだというところで、母性の美化も、超えていく世代をあらかじめ押さえてしまおう方向でおこなわれてる。だからこれは女だけの問題じゃなくて、女にはこういうかたちで押しつけられてるけど、いまの思想統制のひとつの力なんだろうと思うのね。

——三年前にだされた「家庭基盤の充実に関する対策要綱」ですか、自民党政務調査会の手になる。このパンフレットにも抜萃が掲載されてるわけだけど、これはどうい

たいへんなんだというの、気をつけないといけないのね。第三世界の女にとっても、たが生みつづけるのがいいのかどうか、それはわからないけど、女や子どもが貴重な労働力だった農村が都市化して、労働のカタチが賃労働に変化すれば、当然、子どもの数の選択も変ってきますしね。だから、いま第三世界の人たちがどういふ生活をどうつくっていくかというところとして考えてゆくことではないか。

——総体の選択の問題なんで、人口問題だけを部分的にとりだすことはできないということですね。ところで一九七〇年、七二年のとき、優生保護法の改悪が失敗したというのはどういうことなんでしょうか？

森 審議未了で廃案になったというのは、身体的理由と経済的理由をどういふふうな位置づけるべきなのか、結論がでなかったんです。つまりね、たとえば妊娠・出産してしまおうと働けなくなると経済的理由が起つてしまおうという状態が起つば身体的理由におよぶであらうと……要するに、どこまでが身体的理由でどこからが経済的理由なのか、生ん

うコンテキストでできてきたんですか？

村上 家父長制の大家族はかたちとしてはかなり崩壊してる。その結果としてバラバラになった家族を、現在の核家族というかたちにあわせた性別分業によって結びつけていこうという、新たな家族制度づくりというふうにあたしたちは考えてます。「生長の家」なんかのいつてることなんかを見ると、天皇を頂点とする古い亡霊の復活みたいにも思えるけど、じつはそれなりに現在の核家族の状況をつかんだ上で、それを単位にして……

——核家族からあらためて直接に強力な国家を組織していく……

村上 いま経済的理由がはいっていることで、結果的に優生保護法はザルになってる。だけれどいまが自由だとはあたしたちはとらえてないわけ。いまの不自由さをきちんととらえないといけないんだけど、結果的にザル法であることによって、個人の意志に托されてる部分がおおい。それを純化することによって、つまり生産性のある人間はつくりたくないという優生保護法の意図をつらぬいた上で、

だり育てたり働きつづけたりするつながりなのなかでは、バラバラに切りはなせないことなんです。それで、かれらのなかでもぜんぜん結論がでなかった。

——そのことはよくわかるよ。それがいま結論がでたというのはどういうことなのか。

森 これは私の分析になっちゃうけど、母胎をとおして直接に胎児を管理できるようになったのが、最近の医療のコンピュータ化なんです。十年前にはね、この子は先天性の障害があるから生むなとか、大丈夫、どうぞお生みなさいというような管理はできなかつたんですよ。いまは確実にできま

す。

——そうだとすると、身体的理由と経済的理由の分離が困難だという事情は、あまり変つてないんじゃないですか。

村上 それと、あのときは反対運動が非常にもりあがった。反対運動があつたから廃案になったというふうにはくれないけれど、

リブ運動のいちばんさかんなころでしたから、「生みたいのに生めない世の中じやないか」「生む生まないを決めるのは女たち自身じやないか」という主張と、それから、胎児に障害がある場合という許可事項を入れるという問題をめぐって、障害者団体の反対運動もあったんですよ。そういつた両面からの運動のなかで、共産党も公明党も民社党も反対表明してるんですよ。ところが今回は、公明党なんてのはズルズルつと賛成のほうにまわりそうだし、反対をいつてるのは社会党だけなんです。それだけ世の中の右傾化の準備というのが、この十年のあいだに大きいですんで。それは政党だけじゃなくて、女の子たちもそうだし、いろんな人のこのころのなかでかなり状況が変わってる。憲法改正や軍備増強がなしくずしに準備されて、反対する力が実質的に弱くなつていくなかで、かれらが上段から家族の強化や福祉切り捨てをいえるようになったんですよ。

——こんどは胎児条項というのを入れてないんですよ。そのために問題が見えにくくなつてくけど、いま森さんがいったように、コンピュータ化とか胎児チェックとか、医療体制の管理は実際にすすんでる——そういう人

——ゆたかさということだったら、十年前のほうがいいよりそうでしょう。その時代には経済論で押しとおせなかったのに、いまはそれでやれると思ってる。逆なんだな。実状ぬきて、意識だけはみんなもつと金持になつちやたのか。

森 ——この一・七人の状態がつづけば、十年後には納税者はへるわ、消費者はへるわで、資本主義体制があぶなくなるといふところまで考えちゃうわけよ。そんなこと、生むか生まないかの選択の問題とはぜんぜん関係ない！

——そりや関係ないだろうね。

森 ——うん。だからフェミニズムがいまいつてゐることはね、男の人に対立して、「生むか生まないかはアタシが決めるのよ」といつてるように誤解されるかもしれないけど、そうじやない。「生むか生まないかにかんして、ア

間は生まれないうが、いいということ、事前に障害者を抹殺し、生きてる人間を生きがたくするような方向に、実際にすすんでくつて、こんどは経済条項の削除ということ一本でだしてんですけど、それはまた、反対勢力の一部から胎児条項を入れろという声のあがつてくることも見こして。だいたいのマザー・テレサをもちあげて、生命の尊重一本でやって、障害者の生命も尊重したい、いいながら、優生保護法の存在自体はみとめてるわけですよ。経済的理由をのぞきさえすればいいといつてるんだから、はじめから矛盾してるんですよ。

森 ——宗教的観念論一本できてるのよ。受胎した瞬間から人間なのであるから、国家権力はそれを保護する義務があるといきつてるのね。そこで、マザー・テレサを上手にひっぱつてきて、「日本はゆたかな国です。しかし墮胎をゆるしてはまずいね」といふことをいって、胎をゆるしてはまずいね。母性を保護するということ、十年前はほんのちよいとあつたんですよ。ところが今回は母性保護のポの字もない。だからちよつとまちがつたら、母性を保護してほしいなんていいかねないのね、今回は。そこで向うは、お前、保護がほしいのか、

——ンタと相談するんならわかるけど、なんて国家がそんなことをいってくんだらうかね」ということではつながらんじやないかな。国家権力が性的なことなんかには口をだしてはしくないわけ。おかしいわけ。その一点なんです。ね、あたしは。

——それからこのパンフレットを読んで印象がつかつたのは、芦谷薫さんが、「いけにえにするな、十代の性」という文章を書いて、非行という、なんて女の子だけが権限にあげられるのかをいねいに分析して。国家の側が十代の性的乱脈をさかんにいいたてるだけに、いい文章だと思ひました。

村上 ——十代の子がかわいそうだから中絶を禁止しろなんて理屈は、ぜんぜんたつていないでしょ。その子がきちんと選んでるよに、あるいはそういうことを防げるように考へてるんじゃないのね。その子が不幸だから——あたしはかんたんに不幸とはいえないと思うけど、知らないためにそこに追いやられていくのを不幸ということばでいうとしたら、だれがなにをしなければいけないかとい

男女平等の雇用条件がほしいのかと、家庭基盤充実政策のなかで上手に分断してきて。こつちは保護も平等も両方とも当然のことなんだと……

村上 ——経済的理由がいまは必要ないというのにはウソだと思つて。実際には何人も子どもを生みつづけるなんてできないわけなのに、それをキャンペーンとして……

森 ——いまの優生保護法ができた三十四年前にくらべてみなさい、いまはゆたかじやないか、経済的理由はいらぬじやないかと。

村上 ——それはウソなんだけど、どこからがウソでどこまでウソじやないのかというところが、みんなからめとられて、わからなくなつてるのね。たとえば教育費をこれだけかけて、子どもを一流の大学に入れてというのは、欲望が支配されて、みんなが一律のことを考えつてしまつて、そんなこと、本当に子どもを育てるといふこととはなんにも関係ない。そういうふうになんが判断の基準をうばわれちやつてるようなところがあるから、そこで「いまはゆたかだ」といわれると、ついで「そうかもしれない」と思つちやうんだけど、わたし、それはウソだと思つてのね。

森 ——だったら平均一・七人ということはない

——うことであつてね、だから禁止するといふのはどういふことなのか、冗談じやないと、あたしも十代のころにもどつて「馬鹿にするな」といいたい。

——いまの社会で少女たちがどんな状態におかれてるのかということが、「青少年白書」の性非行という項では補導された女の子の数があげられてるとか、いわゆる純潔教育の問題とか、いろいろ書かれてる。と同時に、当の女の子たち自身がうまくそのことを意識できなくなつて。「ポリーフレンドがないと肩身がせまい」という雰囲気がある」といふある女子高生のことばから、性的分業の問題をひっぱりだしてくるあたり、するどい分析になつてますね。

村上 ——その一方で、「生長の家」の影響下では、高校の文化祭で胎児のパネルを貼つてパンフレットをくばつたりしてゐるような現象がある。もう行き場がない、ひろがりやがないといふところに、性も性の関係もあるんで、そのエネルギーが本当の生き方をつかんでいくことになかなかつながらないのね。結局、そ

それが結婚とか家庭とかにむすびつくものとしてしかイメージできないようなところに追いやられている。

——山口百恵フィーバーなんてのも、そのキャンペーンかもしれないね。

森 そうそう。五つ子ちゃんキャンペーンとかね。もうとにかく、女の人は結婚しなくちゃ、子どもを生まなくちゃという、へんな使命感をおおたりたてちゃってね。

村上 「生みの母より育ての母」なんてことばがあるでしょ。でも、いまほど「育ての母」という意識がなくなつて、生んだら母親と子どもはコミということになつてる時代はすくないんじゃない？ 核家族つていうのは母子密着なのね。だつて昔はいろんな人たちの手にかかつて育てられたわけでしょ、むしろ。そこで起つていろいろ問題について、とすれば女が母性を失なつてるからだといわれてるけど、じつは、母性というものがこれほど個人である女に課せられたことはないのよ。そのことの破綻だと思ふのね、あたしは。アメリカなんかだと、未婚の母の家とか里親制度とかね——そのことが日本ではでてこ

いの。でてこないことの結果として、優生保護法がこういうかたちだったから、中絶のほうに流れてしまった——たしかにそういうところもあるのよ。そこを問題としてたてなおしておく必要がある。子どもを生み、ともかくも自分の手で育てなくてはならないということが、戦後の日本のなかで逆にすごく強化されてる。そのへんもつと、母子分離つていうか、育てられない人、育てたくない人から育てたい人へ、子どもは手わたされたほうがいいんだということ、はっきりさせたほうがいい。そうじゃなければ、生めない女の問題も残るしね。男が育てたつていいんだしね。そういうことが視野にはいつてこないのよ。つ、い、生むか生まないか、子どもが子もちじやないかつていうほうに、話がいつちやつてね。

——よその子を育てるとしたら、その子をもらうまでの苦勞とか、どうやつたつて男と女の両方でやらざるをえないわけだから、出産みたいに女にまかせつはなしつていうわけにはいかないね。

森 動機がはっきりしてないといけないよ。育てる気があつたのかなかつたのかと子ども

うんで、排卵誘発剤をつかつたり……。それで突然五つ子が生まれたりすると、それをすごく美化するわけでしょ。ああいうふうにな

だれをうっちゃうのよ。それはやつぱり、どうしても血をまもらなくてはとか、優秀なタネでなくては人工受精の対象にはなれないとか、排卵誘発剤ということの裏側にはそれがありませんよ。

わたしは実際に出産を手つだつてるんだけど、生む行為をあんまりイメージにしちゃうのもやだし、かといつて、自分のからだをバネにして生まなきゃ意味がないんだとか、そういう女のからだのプリミティブなところを強調しすぎるのもいやなの。もつともつと育てるといふことを中心に考えれば、精子をあげてもいいですよという男の人がいるように、子宮の機能を女の人が解放してあげてもいいと思うの。ただ子宮貸しだしとか、ああいうような女たちの性の状況があるわけでしょ。ああいうのもおかしい。なんだか生む機械みたいでいやなんだけど、でも、ああいうふうにしたいという人にナンクセつてるわけにはいかないと思うのね。しかし、国家権力があ

る日突然、「そうだそうだ、健康な女の子宮を借りればいいんだ」といって、男が勢力を

もちはじめたら、これはどえらいことよ。

村上 育てたい人間が育てる、べつに男と女の家族とかたじやなくても、住みたい人間がいつしよに住むんだということがいろいろでてこないよ、ついにはそつちの方向にいつちやうのよ。それがなかなかつてこないだ、具体的には、いろんなところみはあつたけど、なにを原則とするのかというあたりで、どうしても……

森 それはでもね、いままでどうしても一つの原則がでてこなかつたように、多種多様なよ、そのことが証明されたのよ。多種多様なものを一元化したり、これとこれは正しいといつたりするのは、おかしいわよ。

村上 自分の欲望のなかで自分が生きていけば多様化する。一元化したり一律化したりする欲望のあたりは絶対あらわれないと思うの。いまの人間はエゴイスタイックだとかなんとかいうけど、そのためのガムシヤラさというのはじつはすごくストイックでしょ。なんてそんなに我慢するの、なんでそんなに働くの、そんなにストイックでどうして生かれるの、というような人が、ガムシヤラに家だとか地位だとかにしがみついているのよ。いまの社会は欲望によつてつきすすんでるように見えるけ

にきかれて、育てる気はなかつたんだけどできちやつたのよなんて、自分もいわれたくないし、子どもにもいわれたくないね。いざ出産のときだけじゃなく、はじめからはっきりさせとかないと。そういう自信がないんだつたら、いまわたしたちにはなにが必要なのかということをおと相談してさ——そこで男がひいちゃダメよ。「いま欲しくないんだよ」「だつたらあたしにも避妊できるわよ」と、そこに二人がコミュニケーションの道具として避妊具をおいてしまうぐらいのことではできると思う。そして「あれで失敗したんだからな」というギリギリのところ、ひくにひけないところ、中絶の権利というものがあつてね。だから男と女の両方で動機にもどつて考えた方がいいと思うの。

村上 昔は養子縁組とか、家名をたてるためではあつたけど、社会的な親子関係というものがあつたでしょ。いまは動物的な関係にもどされてるんだよね。そういうことがあるかぎり、社会福祉とか社会的保証とかいつてもね、わりきれない血のつながりとかさ、そういうクビキがすごくつよい。

森 そのへんの反動で、いま妊娠しない女性があつたとしても生まなきゃいけないつてい

ど、じつはすごくストイックなの。いまやりたいという欲望にしたがつて生きたら、おなじ価値観のほうに吸収されるはずはないのよ。運動のなかでもさ、そういうことはいけないというふうな空気がでてくると、危険だと思ふ。

森 えらんでるつもりがえらばされて、しかもその範囲がすごくせまい。

村上 本音で語ればね、みんなそれぞれまちまちなことをのぞんでるの。

——しかしね、自分自身の欲望を考えてみてつて意外に浅くなつてるよ。それは相当に開発の努力があるよ。自分でそう思うもの。オレの欲望の底を掘つてつたら世界がひつくりかえるなんて、てつたい欲望はもつてないんだもの。

森 働いてかせぐことしか目標がない。せめてその半分だけは自分のものにして、半分は働く、そういう欲望もないのね。これだけ働いたら三日間は休むとかさ。

村上 このガムシヤラさみたいなものをなんとかしないと、マイホームがコロッと大東亜共栄圏に——いつのまにか目標がやつても気



がつかない、またおなじガムシヤラさでつきすすんじやうんじやない? そこのストインズムはおなじだからね。だから私はね、いまはじつは欲望社会ではない、人が追いついていくものと自分の実感とのズレが大きすぎると思う。欲望というものをずっと自分の等身大のところで大事にしないとね。そんなに結婚したいわけがないのよ。生みたいと思うことはあっても、そんなにおなじでなければならぬという感覚になるわけがないね。

——パンフレット「優生保護法とたたかうために」は四百円(送料一七〇円)。東京都新宿区若葉一の一〇グリーンマンションD号「ジョッキ」内「82優生保護法改悪阻止連絡会」に申し込んで下さい。  
電話は〇三(三五五)〇四二九、(三五三)二三六五、郵便振替は東京七―七四〇五五です。

編集後記

安里清信さんが屋慶名のご自宅で亡くなった。十月二十二日午後二時。六十九歳。食道ガンで食べものがノドをとおらず、声もたせず、かなり苦しめられたらしい。

安里さんは沖縄金武湾の反CTS闘争のなかで、人間はただ生理的な意味で生きるのではなく、もっと大きなスケールの、いわば宇宙的な生をいとなむ権利をもっているという主張しつづけた。その主張や独特のたたかいぶりについては、本誌でもなにか報告をのせ、またご自身にも寄稿していただいた。

葬儀の日、会場の片隅に屋慶名のおじいさんやおばあさんたちが、ひとかたまりになつて、ひっそりと、本当にさびしそうに坐っていたときいた。たたくが巨大組織にたよらず、人間がともに生きる意味を自分の力で問わなければならない度合がますますほど、長い歴史を生きてきた人びとにそなわる力が必要になる。これからもこのさびしさから逃れるすべはない。

油で汚れた海に、安里先生の戻っていくことのできるおだやかなひろがり、またすこしでものこされているといい。

購読の御案内

\*本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

\*申し込みと送金は郵便振替(口座名水牛編集委員会、口座番号東京四一九一七九二)または現金書留でお願いします。住所、氏名、電話番号、何号からということをお明記してください。

\*購読料は送料とも一年分三〇〇〇円、半年分一八〇〇円です。

水牛通信 第四巻第十一号

一九八二年十一月十日

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-3

八巻方

電話〇三(四二五)九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 柳トライプ rint ショップ